

第13回子ども・子育て支援全国セミナー in 熊本 報告書 (※一部敬称略)

開催期日： 2025年11月27日（木）・28日（金）

開催場所： 熊本県民交流館パレア（熊本県熊本市中央区手取本町8番9号）テトリアくまもとビル10階

主催：日本子ども・子育て支援センター連絡協議会（ここネット）

共催：熊本子育てネット

後援：こども家庭庁 熊本県 熊本市 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育協議会

社会福祉法人日本保育協会 全国私立保育連盟 子育てひろば全国連絡協議会

参加者：対面 146名 オンライン 57個人・団体

協賛広告：株式会社利光商会 GeNヒーローズ株式会社 icuco 株式会社

11月27日（木）『開会式』

熊本県地域子育て支援センター 小岱会長の開式の言葉後、主催者を代表して日本子ども・子育て支援センター連絡協議会 柳渓会長より「子ども大綱や100カ月ビジョンを保護者にどのように伝えていくかを考え、また全世代の方に伝えていくことが大切だと考えている。最後までセミナーをお聴きいただきて、施設に持つて帰つて広めていただきたいと思う」と参加者への挨拶があった。

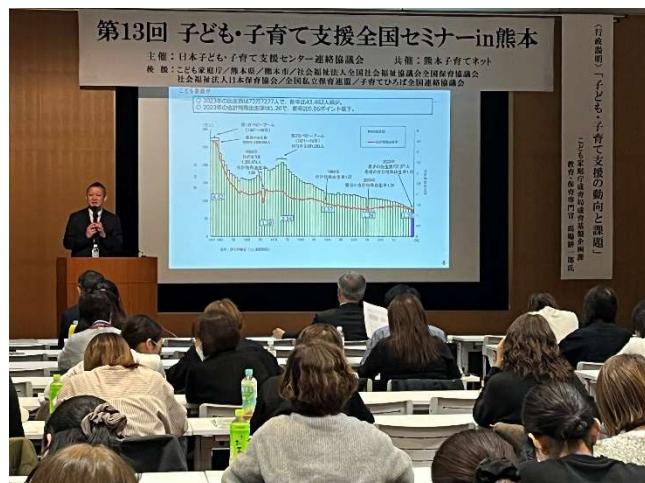
来賓挨拶では、はじめに木村県知事（代理：子ども・障がい福祉局 清水局長）と、子ども応援サポーターのくまモンより、「熊本県でも本年3月に『こどもまんなか熊本・実現計画』を策定し、子ども応援サポーターとしてくまモンも活躍している。今後も地域における子育て支援施設の充実を図つてまいります」と挨拶。次に、熊本市の大西市長より、「熊本市でも子ども計画を作成し、子ども子育て支援はマニュフェストにも一番目に掲げている。子育て支援のために環境を整えていく、現場の声を聞いていくことを大切にし、行政と現場で乖離がないようにしている。こども局には予算も人も手厚く配置し、きめ細やかな子育て支援をしていきたいと考えている。くまモンが登場した時の様に、保育者が幸せな顔で携われるようにしていくのが行政の役割だと考えている。子育て支援は明るい楽しいものにしていきたい。」と挨拶があった。

13:40～14:20 こども家庭庁行政説明



成育局 教育・保育専門官 馬場耕一郎氏

子育て支援は、1989年の合計特殊出生率1.57ショックがきっかけではじまった。それまでの最低であった1966年丙午の1.58を下回ったことで、国が子育て支援に力を入れ始めた。来年2026年は当時の丙午から60年経つ。2030年までに変化させないと日本は終わるとも言われて、少子化を食い止める大事な時で、今が日本の子育て支援の変化のとき。大事な時である。子ども家庭庁は、「こどもがまんなか」をスローガンとし、子ども政策を強力に推進し少子化を食い止めるとともに、一人ひとりの子どもの Well-being を高め社会の持続的発展を確保できるかの分岐点である為、子どもをだ



れ一人取り残さないことを設置法案に記載してある。現代の子どもの30万人超えが不登校、20万人超えが虐待を受けている現状が背景にある。こども基本法の理念にのっとり、全ての子どもが適切に養育されること・生活を保障されることにのっとり、はじめの100か月の育ちビジョンが策定された。生涯にわたるウェルビーイングの向上にとって重要な時期である。しかし、誰一人取り残さないひとしい育ちの保障や、各節目や各家庭や施設を取り巻く環境観に切れ目があることも課題である。2026年度4月より、「子ども誰でも通園制度」が本格稼働される1時預かり事業は保護者のための事業だが誰でも通園制度は子どものための事業（こどもを中心に考え、子どもの成長の観点からの制度）と捉えてほしい。家庭保育の子どもがみんな幸せか？と問われると現実そうではない。チャイルドシート、店のカート、抱っこ紐、ベビーカー、自宅にいれば、同じ玩具、同じ絵本、最近だとテレビやタブレットスマホでYouTubeを延々と見ている生活。ずっと何かに繋がれている生活の子も多い。幼稚園保育園認定子ども園の素晴らしい環境をどんな子（就労等の条件なく、3歳以上でもなく）にも提供できるようにしたい。しかし、全ての子どもに利用してもらうために算出された利用時間が月10時間となっている。専門家チームもこの利用時間で満足いく環境の提供ができるとは思っていない。より良くしていくためには膨大な予算が必要となり、税金が投入される必要がある。子ども家庭庁のミッションは「少子化への歯止め」だけでなく、「今を生きることが子ども達への支援」であることを学ぶお話をあった。

11月27日（木）14:30～16:00 基調講演 「乳児期から育むデモクラシー」～大人と子どもの関係入門～ 一般社団法人ジェイス 代表理事 武田信子 先生



人と人との関係は難しい。日本で当たり前な子育てが、海外では当たり前ではないので、大人は、子ども達に文化や習慣の中で、無意識に社会を見せていく。何かある時には、「なぜ？」と問いただし、当たり前になっている価値観を問い合わせ直そう。なぜ乳幼児期の6年が大切なのか。基本的信頼・アタッチメント・五感・社会性のスキル・感覚統合・体幹・脳の大半が幼少期に出来るからで、乳幼児期に非認知能力を育て、言語発達を促すことが大事である。だからこそ、子育て支援の場や環境では、対応している子どもがどのような子なのかをチェックする必要がある。マルトリートメント（虐待）の予防は、起きる前にアクションを起こすことである。次に育児マルトリートメントについて、子どもの体の調査2022から話された。

保育中じつとしていない、背中ぐにや、すぐ「疲れた」と言う子などが増えている。逆に良い子であろうと努力している子もいる。乳児発達のおかしさ、そりが強い、便秘、寝ない、ずっと抱っこなど普通の子の発達が変わってきている。どうして抱っこにこだわるのか、抱っこ紐に入れていいのか（0日から使える抱っこ紐に問題がある）については、3キロの赤ちゃんの頭は1キロ。3分の1の重さを乗せてスーパーに行けないだろう。赤ちゃんの喉が潰れている。肩こりがある。頭が支えられず抱っこされているのもよくない。バンボやバウンサーに座ると動けない。良くないのに情報発信が難しい時代である。ある種の障害の項目にわが子が重なる親が悲しむことがある。誰も自分の子を虐待しようと思っていないが、マルトリートメントが一般化している。子どもが社会の競争性によって害されないようにしないといけない。アタッチメントは、日頃から適切なケアによって安心安全な環境を保障してくれる人と築かれる。今、これから子ども達を育てることや、子ども達を育てる大人を育てることを考えることが大事ということを語られた。

11月27日（木）16:10～17:40 特別講演

「安心と挑戦の循環をどう作るのか」～これからの子育ち・子育て支援のかたち～

東京大学大学院教育学研究科 教授 遠藤利彦 先生

乳幼児期、子どもの一番近くにいるのは家庭では、母親、家庭外では保育園・支援センター等の保育士や職員である。その中で、「愛情」とは違う「アタッチメント」(愛着) がなぜ必要なのか、その子どもに関わる大人はどう接したらよいかが問われる。こども家庭庁ホームページ「はじめの100カ月ビジョンの育ちビジョン」の中にも、乳幼児の育ちには、安心と挑戦の繰り返し・豊かな遊びと体験(挑戦)・アタッチメント(安心を支える)の大切さがわかりやすく記載している。子育て支援は子育ち支援を優先させ、それに適った子育て支援の在り方を提案・実現すべきであり、親以外のおとなが直接かかわることで育ちを支えていくことの重要性を学ぶ。

○「アロペアレンティング」の役割（集団共同子育て）

保護者が子どもの発達にマイナスをきたすこともある為、「子育て支援」と「子育ち」のバランスが大切。人間の子どもは極めて未熟であるため、しっかりとケアしなければならない。(二足歩行→骨盤構造の変化→残道の狭小化) 日本では高度経済成長期に浸透男女の役割分業が固定化した。江戸時代の親子関係、父親が積極的に子育てに関与していた「集団共同子育て」および「父親養育」はそれなりに機能していた。現代は、意図的に作っていかないといけない時代である。生物的な進化から見ても意図して多様な関係性を子どもが経験できる場と機会を設ける必要があると感じた。

○心の土台を築くアタッチメント

子どもの感情が崩れた時、怖くて不安がる時、安心感・安全感に浸ろうとする時、単にスキンシップとは、異なる(皮膚接触)「アタッチメント」には抱っこに限らず遠くから見守る、声をかける等、手段はどうであれ「安心感」を与え、支えることの重要性がある。安心感が確保されている時が、医学的整理的にも心からだが健康な状態であり、たてなおすときにアタッチメントが重要となる。それは、何歳になっても必要で大切な意味がある。

○世界における縦断調査の事例（「アタッチメントの剥離」が子どもの心身全般にどのようなダメージを与えるかの調査）より、人が一番初めに身に付けておくべき心の土台が自己信頼(自分が愛してもらえる価値があるという感覚)と、他者信頼(ほかの人は助けてと言えば助けてくれるという事)であり、家庭で「アタッチメント」が受けられない子どもには、自己信頼と他者信頼につながる保育士や幼稚園の先生等から受ける「アタッチメント」が必要であることを知る。

○安心感の輪と安心の基地

安心と挑戦の繰り返しであり、小さい時にくっつくという安定したアタッチメントを受けている子どもこそ自立を育み一人でいられる能力が育つ。それには、大人が安全な避難所としての役割を果たすのが大切。崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止めそれを大人が鏡となって映し出してあげるようにする。ただし、大人の役割はここで終わりではなくあえて大人から話して、背中を押すことが大切。応援し離れたところから見守ることが「安心の基地」となる。安心の輪を少しずつ自分で大きくするのが「発達」である。避難所基地は子どもがくっついてこようが、そうでなくともそこにあり続けることが重要。いざとなつたらいつでも戻ってくっつける感覚を持ち続けることが大事である。



11月28日（金）9:30～11:30 記念講演

「教育の危機と再生」 凱風館 館長 神戸女学院大学名誉教授 内田樹先生



はじめに、内田先生自身の父子家庭子育てされた経験と幼少期の経験から、育児哲学について話をされた。子育て中は、育児の不安で父の自己実現を妨害していると娘に思われたくなかったこともあり、メインの仕事は家事・子育てと決めて子育てに専念された。この時期が、一番幸福な12年になったそうだ。また、「根拠がない自信」が「子どもにとって一切要求しない」という育児哲学となったそうだ。

「教育の危機」について、時代における社会変化を通して、半世紀で劇的に変わったことが危機につながっている事、価値観の差が無自覚に子育てや学校教育に入ってきたことに気付いていない事を語られた。どうやって

子どもを強者にするかを今の教育や子育ては考えることは多いが、人は進化するときは必ず弱くなる。変化するとき、弱くなった時、誰も傷つけないように保証すると、学びの場は基本的に温室で、守ってあげれるものでないといけない。学校教育で「アイデンティティー」と言うのをやめて「成長」することに重点を置き、成長するまで子どもたちを守ってほしい。また、子どもは適切な距離を取り見守る事、「経緯」と「好奇心」をもって見守る事が、根拠のない自己肯定感につながるという事を学んだ。

11:15～11:45 総会

会則 第14条 総会は、毎年1回開催し次の事項を審議、決議する。

14条の3 会議の議長は、会長がこれにあたる（これらに従って、進めていく）

・事業計画及び事業報告に関する事、予算及び決算に関する事（令和7年度の事業計画案など）

事務局長 國重俊亮氏

☆令和5年度と対比した昨年度令和6年度の決算書

令和5年度は山形大会、昨年は熊本で大会を県内版で実施したため、桁が違っている。以前はコロナで縮小などしており、ようやく復活してきたのが令和5年度。決算書を見る時は、そういう事を考えてほしい。なお、総会費用の令和6年度はオンラインで総会を行ったため。令和6年度は熊本プレ大会であったため、熊本県内の人しか参加をしていないという事で、総会は別途12月にオンラインで講演会も伴って開催した。

☆令和7年度の今年度の事業計画について

活動テーマは、「子ども・子育て支援の旗を掲げて進もう！」という、長く続いたテーマだった〔全国大会〕を〔全国セミナー〕と名前を変えて、熊本で行っている。コロナも去って、安心して集まれるようになったが、前のようにはなかなかいかず、役員会などオンラインで行った。ただ、はじめの100ヶ月のことではこども家庭庁に実際にヒアリングをして、どのように進めてくかということで、この熊本全国セミナーの場をお借りして行っている。ニュースレターやHPの充実などは変わりなく行っていく。組織役員の増加については、足踏みしている。とくに役員のうち理事会を構成する理事を増やすことが課題である。



講評 ここネット監事 肥塚新一氏

令和6年度日本子ども・子育て支援センター連絡協議会の決算書において精査した。相違なく適切に処理されていたことを確認し、報告。

☆決算、今年度の事業計画などの説明について、質問等なし。承認。

11月28日（金）12:45～13:30 メディカルセッション1

「子どもの育ちと電子メディア」子育て支援の中でどう啓発するか

九州医療センター 小児科 佐藤和夫先生



親子の大切なふれあいを電子メディアが奪っている。はじめに、言葉の発達と基本的に信頼感と愛着形成について話された。人のやり取りのその中で、基本的信頼感と愛着形成マザリーズ（母の声かけ）母の優しい声掛けが大切である。授乳は五感を介したコミュニケーションであり、訴えると満たしてくれる、基本的信頼感、愛着になる。基本的信頼感、愛着は、人とのふれあいによって育まれていく。しかし、スクリーンタイムが長くなると親子の会話が減る。親がスマホばかり見ていると子どもに目が向かなくなるメカニズムを学んだ。次に、睡眠と視力の発達・目への影響について話された。乳幼児期の睡眠は、この時期にパターンが確立していくが、乳児でも、スマホを見ると寝る時間が遅くなる。体内時計は放っておくとずれる。昼、明るいから動き、夜は暗いから寝る。朝光を浴びることは、体内時計をリセットするために必要な事である。また、近視も多くなってきた。近視を予防するには、できるだけ距離を離して見る。（30センチ以上）十分に外で遊ぶ（1日120分以上）後天性内斜視を予防するには、2歳未満はデジタル機器を控える事、2～5歳は、短時間視聴にとどめることが大事である。目を休め30分に1回、20秒以上遠方を見るようにすることが必要だ。幼児期のタブレットしようと怒りの爆発についても話され、スマホやタブレットだけに頼らない子育てを支援するためには、子どもの視点、保護者に寄り添う姿勢が前提になる。メディアについて正しく知り、メディアが与える影響等をそれぞれの立場で保護者の気持ちを共感しつつ伝える。子育て支援を基盤に乳幼児期のメディアテラシーを早く上手に育てることが大切である。

乳幼児の健やかな育ちに大切なこと、電子メディアの影響を保護者に上手に伝えていくこと、年齢に応じた電子メディアの使い方を、妊娠中、乳幼児期から繰り返し啓発、（使わせない、時間を制限する、内容を選ぶ、一緒につかう）スマホだけに頼らない子育て支援していくことを学んだ。（豊かな遊びと体験で心と身体を育む楽しい子育てを）

13:30～14:15 メディカルセッション2

「子どもの発達支援と子育て支援」

口から考える子どもの発育支援の在り方

歯学博士 ありた小児歯科 有田信一先生



口の中には、子どもの健康状態や日常生活状況、そして心理状況が表れる。今回、3つの視点から考える子どもの発育支援の在り方を学ぶ。①胎児期から乳歯列完成期までの歯・口の発達過程では、乳歯は20本で、5種類の乳歯（乳中切歯、乳側切歯、乳犬歯、第一乳臼歯、第二乳臼歯）があり、それぞれの歯に役割が異なること、乳歯の萌出時期は個体差が大きいこと等、口とその機能について学んだ。

②歯磨きや食事の場面でのアタッチメント形成法では、具体的に支援者が知っておくべきことを話された。口腔内で処理できる食物を与えることが重要であること、処理できる食べ物の質は歯（特に乳臼歯）の萌出時期で判断すべきである事、食事中に足のつま先から踵までしっかりと着地することが重要であること、噛みやすく、飲みやすい量を体験させることが重要であること、ドロドロの状態で口狭（口の出口）から、咽頭に流し込むことを体験させる必要があること、食事中には、水・茶は飲まない習慣形成を心がける必要があることなどたくさんの学びがあった。

③歯・口の発達の支援方法の紹介があった。歯の発達は、他の発達（睡眠・呼吸）にも影響してくるので、保育園での歯科検診では、虫歯があるかに加え、食事の提供の目安や食事が口の発達に合っているかを伝えているそうだ。また、食事中に足の裏を床（台）に付けて食べられているかも確認してほしい。歯科医は半年に1度の健診になるので、保育士が毎月会議をし、子どもの発達に食事があっているかの見直しをして決めるよう正在しているとのお話しは参考になった。

11月28日（金）14:30～16:10 パネルディスカッション



パネリスト4名、吉岡伸太郎（社会福祉法人おひさま会 専務理事）・甲斐恵美（認定こども園風の丘園長）佐藤和夫（NPO子どもとメディア代表理事）有田信一（ありた小児歯科）による「5ビジョン 子育て支援の現場で何ができるのか」のパネルディスカッションをおこなった。

・吉岡先生より「はじめの100ヶ月ビジョン」が今後の国の子ども政策にどのように影響するのかを業界の団体として、現場が何を願っているのかを語られた。支援センターでは「子育ち」支援、子どもの育ちを支え、その子どもを支える親を支援してほしい。法律がなければ運営ができない。日々の現場と、予算、制度、政策がどのようにかかわりになっているかが私たちの保育につながっている。目に見えないけれど土の

中に、草木を育てるまでの仕組みをつくっていって木の生長になること。2030年に向けて、何とかしなければならない3つの基本理念の主なポイント子どもの視点に立って、子どももコミュニティーの中で子どもも同士触れ合わせることが大切。これが誰でも通園制度となると話された。

・甲斐先生より「保護者のウェルビーイングと保護者支援」について語られた。保護者・養育者のウェルビーイングを応援するためにはどうしたらよいか。保護者が子育てを一人で抱え込まないようにすべての保護者がつながる子育て支援センターの実践を紹介された。(オープンスペース・育児相談・アンティマミー等) その中で、私たちが保護者を一人ひとりそのまま受け入れる事が大切で、保護者に子どもがいてよかつたと思ってもらえること、子どもが笑顔でいる事を感じて楽しんでもらえることを大切にされている。子育て支援センターは、リアルな子育て体験ができる場所であり、行き場所や遊び場を求めている保護者の温室のようなものでありたいと話された。

・メディアセッションで登壇された佐藤先生より、子どもの視点からすると、子どもが成長するのにメディアが邪魔しないようにしてほしい。保護者だけのせいではなく、現代社会全体の課題である。有田先生より、日本には生まれた時からの子どもを対象とした世界に誇れる法律が出来た。また、現場を知っている人が向上しようとしていることも素晴らしいと話される。

・全体討議に入り、3つの事について討議が行われた。(キーワード)

① 実際に駄目だと分かっていても伝えなければいけない事～保護者をどう味方にしていくか～

佐藤先生 「子どもの育ちを保護者と共に見守り楽しむ」

吉岡先生 「参道一共感 仲間一連帯」 孤立感、大変さを共感してほしい

甲斐先生 「信頼関係を築く」

有田先生 「保護者と共に子育てを見守っていく」「主体的にみる 変化を見ていく」

② 社会の問題子育てを取り巻く環境 どうかわっていくといいか

佐藤先生 「社会が子どもの遊びを確保する」

有田先生 「子ども真ん中社会の仲間とつながろう」

甲斐先生 「育児中子育て中に早く帰れる社会」

吉岡先生 「社会全体の意識改革～非常識からの脱却～」

③ 今こそ必要な支援の在り方

佐藤先生 「ヘルシーメディアユース 真に豊かな遊びの体験」

有田先生 「こどもまんなか社会は高齢者まんなか社会」

甲斐先生 「ゆとりを生む」

吉岡先生 「未来への投資 ムーブメント」

・目の前の保護者・地域に対して学んだことをどう生かしていくのか、どうアクションを起こしていくのか、これから私たちの課題となった。

『閉会式』

主催者を代表して、ここネットの柳溪暁秀 会長が挨拶し、共催者を代表して熊本子育てネットの小岱紫明 会長が挨拶した。今回の参加に感謝の気持ちでいっぱいあります。

そのなかで、来年度の全国セミナーは東京都内で開催できるように準備している。

みなさん来年もぜひおこしください。

また、みなさん帰られたらどうぞ伝達くださいと来年の次期開催への引継ぎがあった。